

新編集委員長挨拶

高部英明

「こんなミー・ハーな新聞なんて、きっと、山中先生が激怒するぞ」。私が、確か学部の4年生で、名大プラズマ研究所（核融合科研の前身）にいた頃、Seven Starsの創刊号を読んだの感想であった。当時はB4片面に手書きで青焼き（若い人、知っているかな？）の新聞。案の定、千代衛大先生の一喝で、程々に「節度と品位」のある所内版に成長していった。

所内版も通算発行回数が千回を超えている。一時、Webのみで紙面配布中止など、私のような古い人間には淋しい時期があったものの、配布も復活し喜んでいる。レターボックスにSeven Starsを見つけては、ラブレターを見つけたような心境になるのは私だけでしょうか？（やはり私も、今はやりの「変人」なのか？）

何故、所内版は必要か？ つまり、発刊の目的は何なのか。編集委員長は皆さんに説明する義務があると考え、ここに簡単に私の考えを述べます。

「一般に、組織には2種類ある」と5年程前に所内版に書きました。それは「機能体」と「共同体」です。機能体とは、ある目的をもって皆が役割分担し事を成し遂げていく組織です。当然、レーザー研はそのための組織です。一方、共同体には共通の目的は無く、ただの集団を示します。その好例は自治会です。偶然、隣近所に住むようになった集団が気持ちよく暮らせる助けをするのが自治会です。一般に組織は両面を兼ね備えていますし、その傾向は機能体である組織が古くなるほど強くなります。俗に言う「建前と本音」にも関係します。

所内版はレーザー研の170人ほどの構成員に毎週配布されています。私は、センターが概算要求書に書いているような建前だけの機能体では、人間関係もギスギスし、索漠（さくばく）とした職場になっていくと思います。日本では、「こんな人間関係いやだ。新しい職場に移ろう」と思っても、まだまだ、そう簡単には移れません。そこで、大げさに言えば、センターを運命共同体と仮に思って、人間関係の潤滑油的役を担うのが所内版である、と私は考えています。一方、機能体としての広報活動は所外版が担うことで、所内版と所外版が相補的となるのです。

こう考えると、所内版には、もっと、構成員全員の声が浮き彫りになるような編集方針が要求されます。換言すれば、“Top-down”から“Bottom-up”への編集方針の転回です。とにかく、より多くの方に書いていただきます。執筆依頼がきたら、気持ちよく、「わたしの・・・」「わたしにとっての・・・」と、自己の経験に根ざした教訓、体験談、意見など書いてください。「筆が進まないーい」という方には、優秀なスタッフがインタビューに参ります。どうぞ、貴方の貴重な人生の一面を所内版に吐露して歴史の一ページとして下さいますよう、お願いします。皆さんと一緒に所内版を作っていく。それが私の方針です。